

## 2020年に向けてより良い環境を目指す



国立研究開発法人 国立環境研究所  
環境リスク研究センター（環境リスク研究推進室）

室長 鑪 迫 典 久

Norihisa Tatarazako

2020年は東京オリンピック開催の年ですが、環境問題でもマイルストーンの年になります。2002年にヨハネスブルグで開催された、持続可能な開発に関する世界首脳会議（World Summit on Sustainable Development, “WSSD”）で化学物質の管理について「予防的取組方法に留意しつつ～化学物質が人の健康と環境にもたらす著しい悪影響を最小化する方法で、使用、生産されることを2020年までに達成することを目指す」ことが合意されています。REACHや化審法の改正などはこの合意に基づく対応ですが、膨大な化学物質を相手に効率的に減らしていくのはなかなかうまく進まないようです。

生物多様性条約（Convention on Biological Diversity（CBD））で生物多様性の保全と持続可能な利用について2010年に合意された、「生物多様性戦略計画2011—2020および愛知目標」も2020年を一つの区切りとしています。昨年の第12回締約国会議（COP12）で発表された世界生物多様性概況第4版では、2020年までに達成すべき55目標中46の達成が不十分と評価されています。

地球温暖化対策は、2015年12月にパリで開催が予定されている国連気候変動会議（COP21）で、2020年までに各国の温室効果ガス排出削減レベルをどれだけ引き上げられるかと各国が温暖化防止のために実践する2020年以降の新しい法的枠組みに関する議論が行われます。

2020年に向けてより良い環境を目指す、という目標に対して上記のように各方面で様々な努力が払われていますが、欧米に比べると日本では現状の環境に対して不満を抱いている人が少ないように思えます。どちらかというところ現在の環境行政を執り行っているのは1970年代からの公害経験者が多く、環境は昔よりも良くなっているという自負の念が強いからなのではないでしょうか。環境問題は公害の時の加害者（企業）と被害者（住民）といった対立関係は失せ、国民（または地球人）が被害者でも加害者でもあるため、境目が曖昧な上に被害の程度や影響が薄く広がっています。また自然と環境は別の概念であり、環境とはヒトを中心としてそれを取り巻く周囲の状況のことを指します。生活環境、職場環境、家庭環境…などの単語からも自然と環境は違うことが分かります。自然環境ということばは、“人間の行動、生産と消費の生活に直接、間接の影響を与える自然的諸条件の総体”と定義されています（ブリタニカ大百科事典）。つまり良い環境を目指すには、常にヒトを中心とした守るべき範囲と年数（環）を念頭に置きながら、その境目（境）を考えることが重要になります。ただし守るべき環（カン）の大きさを、家族、企業、街、国、地球か、あるいは時間軸を1年にするか100年にするかによって、価値が多様化し、善悪の判断が逆転することがあります。つまり守るべき環の内側には善でも、外側にとっては悪い環境の場合が存在します。

現在2020年に向けて様々な環境に対する取り組みが行われていますが、大きな環の中でヒトも生態系を構成する生物の一員として仲良く共生する、柔軟な価値観を持った社会を形成していきたいものです。